『日本新聞』とロシア・ソビエト文学

―シベリア抑留者の文学空間―

溝　渕　園　子

【キーワード】『日本新聞』、ロシア・ソビエト文学、シベリア抑留、日本人捕虜、収容所

はじめに

1945年、日ソ中立条約を破棄したソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連）は８月８日に対日参戦し、満洲や南樺太、千島列島に侵攻した。第二次世界大戦の終結後、武装解除され投降した日本軍の捕虜や民間人らは、労働力不足に悩むソ連によって、主にシベリアや中央アジア等の開発地域に労働力として連行・隔離され、最長11年とも言われる長期にわたり抑留された。当地の厳寒かつ劣悪な環境に加え、飢餓に代表される苦難の生活や苛烈な重労働によって、約57万とも60万とも数えられる多くの人的被害が生じた。死亡者数については、種々の議論があるものの、2019年の厚生労働省の発表では約５万８千人とされている[1]。

その意味で、シベリア抑留とは迫害、食料不足、伝染病等の、多くの要因が絡む大きな人口移動であり、戦後のロシアの一部であると言えよう。シベリア抑留の研究は、これまで日本とロシアにおける活動・成果がほとんどであり、特に日本ではすでに蓄積がある。膨大な資料をもとにまとめられた若槻泰雄の著書『シベリア捕虜収容所』（1979年）[2]は全体像を描いた最初のものとされるが、その後も数々の研究がなされてきた。

また、ロシアでは、イルクーツク大学の歴史学者クズネツォフの研究『シベリアの日本人捕虜たち』[3]が代表的な成果として挙げられる。近年は、カザフスタン出身の歴史学者ムミーノフ[4]がイギリスで英語論文を発表するなど、英語圏での研究もわずかながら見られるようになった。しかしながら、抑留体験じたい政治的に複雑また心情的に深刻な問題をはらむため、文献資料や関係者の証言等を得る際に困難を伴う場合が少なくなく、全容を解明することは容易ではないというのが現状であろう。

さらに、日本兵捕虜の収容所生活の〈実態〉については、高杉一郎、斎藤六朗らによる体験記[5]、ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会編『捕虜体験記』[6]をはじめとする記録、洋画家・香月康男が長きにわたって自らの抑留体験を描いた連作「シベリヤ・シリーズ」（山梨美術館、1995）、また近年再評価されている広島ゆかりの画家・詩人の四國五郎の諸作品[7]等によって伝えられてきた。最近では、抑留者の少数派としての女性に光をあてたドキュメンタリー

番組[8]（小柳ちひろプロデューサー）も放映された。

こうした過去の記録や、物語化された記憶の保存・伝承が、研究においても重要であることは言を俟たない。だが、その当時の収容所生活での文化活動の一端を知る上で、収容所唯一の公式の日本語新聞だった『日本新聞』が持つ意味もまた、決して小さいものではないであろう。長らく現物による全容の確認が困難であったこの新聞は、ソ連末期のペレストロイカが進む中で、極東軍管区軍事史博物館の許可を得た朝日新聞社から全３巻の書籍として復刻出版されたことで、全貌が明らかになった史料である。日露双方のシベリア抑留研究において、この復刻版が刊行されるまでにも、日本に持ち帰られた号を収集し紹介した今立鉄雄の著書[9]や、編集者の一人であった片岡薫の体験記[10]をはじめ、元捕虜たちによる体験記や若槻の著述等に、『日本新聞』への言及は散見される。

しかしながら、『日本新聞』じたいを素材として、内容を分析し考察した研究はまだ少ないと言えよう。こうした観点からの日本語論文としては、山田理恵「シベリアの日本兵捕虜収容所における体育・スポーツ活動：「日本新聞」を手がかりに」[11]や、宮川真一「占領期ソ連のシベリア抑留者教育―『日本新聞』の描く天皇像」[12]が挙げられる。また、外務省の戦後記録（外務省記録、1945-1951）[13]には、シベリアでの日本兵捕虜の待遇や作業、食糧事情、民主化教育に関する物的データに基づく記述が中心となっており、収容所生活の実態やそこで行われている文化活動に関する具体的な報告への目配りは見られない。

『日本新聞』は、もともと日本兵捕虜を対象にした収容所新聞であった、徐々に兵士のみならず民間人を含む捕虜全体に広がりを見せ、所内での民主運動の高揚とともに、熱狂的に読まれるようになっていった。やがてソ連各地のすべての収容所で壁新聞が作られる[14]に至る、その出発点でもあった。この媒体は、外務省の戦後記録といった公的史料では網羅されない部分、つまり収容所での生活や活動の実像を知る上で、一つの手がかりとなりうるものと考えられる。

以上をふまえて、本稿では、宣伝メディアとしての『日本新聞』[15]（『日本しんぶん』[16]）の性質を考慮しつつ、収容所という一見すると閉塞的な場が、情報を介してソ連国内及び日本国内とつながる地平に、いかなる文学空間が立ちあらわれたのかを素描したい。特にロシア・ソビエト文学の掲載記事に限定し、整理した特徴のいくつかについて考察を加え、今後の研究の可能性を引き出すことを目的とする。

１．『日本新聞』について

１－１．概要

まず、『日本新聞』がどのような新聞であったか、概要を述べる[17]。

極東・シベリアをはじめとしてソ連各地の日本人捕虜収容所では、捕虜同士の関係において終戦前の軍隊秩序が保たれていたために、反感を持った下級兵士の間に、軍隊組織や階級序列の解

体と民主化を求める反軍闘争が起こった。戦時中に上官であった将校や高等下士官、憲兵、警察官らを「反動分子」と見なし、毎日のように「つるし上げ」が繰り返されていた。つまり、反軍闘争によって、収容所内の旧日本軍の階級制度は崩壊していった。これに代わって、兵士を中心とする、新たな民主的な組織体系が作られるようになる。

民主運動は、それが自発的なものなのか外発的なものなのかという議論の余地があるものの、こうした反軍闘争を原点とする民衆的な運動であったと言える。『日本新聞』を中心に、日本の軍国主義や侵略政策への批判、ソ連型民主主義・社会主義思想の啓蒙が行われることで、収容所内の民主化が進んでいったとされる。「アクチブ」（活動分子）と呼ばれる民主運動の指導者になれば、労働、飢餓、寒さから解放され、さらに活躍すれば帰国の順位が優先されるという噂が流れたため、活動への参与に拍車がかかったようである。実際、民主運動の指導者であった捕虜たちは、帰国後日本共産党に入党するケースが多く見られた。

各収容所では、「日本新聞友の会」が結成され、『日本新聞』の講読会が開催された。この友の会の活動が、「民主グループ」の活動へ、さらには選挙によって選ばれた「反ファシスト委員会」へと発展し、華々しい活動報告が紙面に掲載されることとなる。

このように、『日本新聞』は民主運動と密接に関わるようにして発行され続けた。それは、収容所の内部の活動を促進ないし監視する権力媒体であると同時に、日本人捕虜にとって、一部の人的交流を別にすれば、収容所の外部と積極的につながる唯一の情報メディアでもあったと見られる。

『日本新聞』は、極東地域の中心地ハバロフスクで刊行されたタブロイド判の新聞であり、1945年９月15日に第１号が発行され、1949年12月30日の第662号をもって終了した。時期的には、日本のポツダム宣言受諾後すぐに創刊され、朝鮮戦争の直前まで続いたことになる。この新聞は、シベリアの抑留者にとって唯一の公式の日本語新聞であったが、中央アジアのカザフスタンをはじめとする、ソ連邦内の各地にある日本人収容所にも広く配付されていた。

ソ連陸海軍政治部の管理下に置かれた『日本新聞』の目的は、ニュースや情報の提供とともに、日本人捕虜の政治思想教育、いわゆる民主運動の教化にあった。記事内容は政治・社会関連が中心であったが、その他文学も含まれていた。そこでは、当時のソ連と日本の双方の報道メディアを情報源としながらも、特に日本のメディアについては偏向が見られた。

表向きは、民主運動とこの新聞は日本人捕虜の自主性に依拠するものとされた。だが、その信条が実態と乖離していたことは、先行研究ですでに明らかにされてきたところである。実際には、ソ連当局に民主運動の手段として『日本新聞』が利用され、その編集に日本人捕虜、戦前に左翼活動に携わった者たちが参画していき、捕虜の民主運動の有志が仲間を指導する形で民主運動を推進した面があったことは否定できないだろう。

こうした状況は、宮川真一の前掲論文を参照すれば、第二次世界大戦終結後の対日占領の初期

に、ソ連が持っていた以下の４つの目標の一つと関わるものであると考えられる。[18]

(1) ヤルタ協定に基づき、南樺太および千島列島をソ連領とすること。
(2) 日本を分割占領もしくは分割統治すること。
(3) 日本に於けるアメリカの威信を失墜させるとともに、アメリカ主導下の占領行政に可能な限り参加し、日本の非軍事化・民主化をはかること。
(4) 敗戦に伴う日本の社会的・経済的混乱に乗じて共産主義を浸透させ、共産党を中心とした野党連合政権もしくは共産党単独政権を樹立すること。

以上の (3) (4) にあるように、ソ連側としては、戦争で〈失われた〉領土内の設備や施設の回復に従事する労働力の確保という実質的な目的の他に、いずれは日本へ帰還する捕虜たちを通して、「アメリカ主導下の占領行政」に介入し、日本に「共産主義を浸透させ」るということを意図していた様子がうかがえる。すなわち、戦後ほどなくして、日本に対しては兵士や民間人による戦禍の〈代償〉を要求し、アメリカに対してはイデオロギー上の抗争を始めたと言えよう。

1945年９月４日のソ連共産党中央委員会にて、『日本新聞』の刊行が正式に承認され、この新聞は1949年末の２か月を除き、原則として火・木・土の週三回、刊行された。副題には「新日本建設へ」とあり、欄外にロシア語で「新聞はソ連にいる日本人捕虜のために刊行される」と記されている。

編集長を務めたソ連内務省イワン・イワノビチ・コワレンコ少佐（1945年9月－1949年9月）は、編集に決定的な影響を与えた人物と言われている。『復刻　日本新聞』第１巻及び第３巻の付録から得た情報等によれば、当初、ソ連側のスタッフのみで編集されていたものが、後に当局から選ばれた日本人捕虜も加わるようになり、ソ連側15名、日本側50名ほどのスタッフによって編集・発行されていた。日本側編集者は、当初の宗像創から浅原正基に変わり、浅原は「シベリアの天皇」と呼ばれるほどの絶大な権力を持っていたようである。さらに、戦前に左翼運動の経験があった相川春喜、片岡薫らが加わった。

体裁は、創刊号及び第２号は４頁立てであり、以降の号は２頁立てにまとめられた。だが、1946年２月28日付の第71号以降、再び４頁立てになり、文化・文学の記事が増えていく。刊行部数は、公的には20万部とされており、その数字に従えば、当時の日本人捕虜を約60万人と考えれば、３人に１人の割合で配付されたことになる。複数人で回覧したり、またシベリア抑留を描いた文学作品から壁新聞のように掲示されたりした様子がうかがえる。

なお、創刊号から最終号に至るまで、『日本新聞』編集所は、ハバロフスクにおかれた[19]。

１－２．記事内容

『日本新聞』の掲載記事の主な情報源については、復刻本の付録に次のものが挙げられる[20]。ソ連の『タス通信』の配信、NHK（東京放送）の短波放送の受信、ソ連共産党機関紙『プラウダ』の記事、日本共産党中央機関紙『赤旗』等の日本の新聞記事、各収容所からの投書等である。世界の情勢やソ連国内のニュースは、ソ連国内で発行されていた新聞を親新聞として、そこから記事や写真の提供を受けている。他方、現在の日本に関する情報は、発行から一か月遅れで入手する『赤旗』も参考にしていた形跡が見られる。

内容は、世界情勢、ソ連国内の話題、収容所での文化活動・文芸欄であるが、次第にニュース報道よりも、社説・論説や時事解説の方に比重が置かれるようになり、やがてレーニンやスターリン、ソ連の社会システムや思想等の特集記事が増加していく。こうしたイデオロギー重視への変化は、先行論に指摘されるように、『日本新聞』における「宣伝メディアとしての側面の強化[21]」を示していよう。

『日本新聞』を中心とする民主運動の変遷と意味については、小林昭菜は、アメリカのスティッチ史料を手がかりとして、次のように述べている。

> ソ連の捕虜収容所における日本人軍事捕虜の共産主義化の動きを、スティッチ史料は一九四七年、一九四八年、一九四九年とそれぞれ次のように分析している。…（略）…一九四七年は日本人軍事捕虜の部分的な「ソビエト化」、一九四八年は「ソビエト化」の躍進、一九四九年は「ソビエト化」の攻撃的性格の露呈と日本社会へのネガティブな反応、と言えよう。[22]

このように1948年あたりから、日本人軍事捕虜の間で「ソビエト化」が急速に浸透し、その１年後にはラディカルなものへと変貌したと見られている。

また、戦中から戦後への体制の移行をめぐって、富田武は以下のように指摘している。

> 民主化運動は、当初の素朴な反軍闘争からイデオロギー過剰の政治運動へと変質した。その極地が一九四九年五月、六万六三四三人が署名した「スターリン大元帥に対する感謝状」である。捕虜が自分たちを長期にわたって抑留し、過酷な労働を強いた最高責任者に感謝するという転倒は、天皇制軍隊とスターリン捕虜収容所が実は、兵士の精神構造においては瓜二つの存在だったことを思わせる。…（略）…「強制的に同質化」していたのである。[23]

ここでは、自らを強制的に同質化する兵士の精神構造において、天皇制軍隊とスターリン捕

虜収容所との間に類似性のあることが看破されている。すなわち、日本人軍事捕虜が、当初は外発的だった「ソビエト化」を加速度的に内面化していく背景には、戦前期からの構造的連続性があったことを示唆するものであろう。

さらに、収容所の外に目を向けるならば、当時のソ連では戦後復興に取り組み、農民を中心に厳しい締め付けを行う一方で、アメリカを盟主とする西側陣営に対して、東側陣営の盟主として国際的な競争や対立を強めていく。いわゆる冷戦期を迎える中で、このことはソ連の国際的な地位と威信を高め、アメリカという仮想敵との競争は、戦後も国内において人的・物的資源を動員しつつ引き締めを続けている実情を正当化する動きへと結びつくのであった。折しも国内では、1946年に始まるジダーノフシチナと呼ばれる、芸術・学術分野を中心にイデオロギー的統制が強化された時期であった。緊張や不安が加速する情勢において、こうした激しい思想統制の様子は、『日本新聞』の言説にも語りの強固なパターン化や特定の人物の神話化といった形で反映されている。

このような状況下に『日本新聞』が置かれていたことをふまえた上で、続いてロシア・ソビエト文学との関わりについて論じたい。

2.『日本新聞』とロシア・ソビエト文学

2－1．全体的な傾向

『日本新聞』に掲載された文学・芸術関連の記事について、まず、全体的にどういう傾向が見られるのか確認する。

記事の割合について、『復刻　日本新聞』第Ⅲ巻巻末の索引を手がかりにすれば、文学・芸術（音楽・美術・演劇・映画）項目数全体のうち、ロシア・ソビエト関係の項目数は約15％（索引総数431件のうち該当項目数は64件）であった。だが、稿者が全巻から抽出した該当記事の総数はこれより多く、本稿末尾資料にあるように262件であった。ただし、この単純な数値化には難しい問題が孕まれている。はたして文学・芸術に入るのか、社会に入るのか、区分けの判断に迷うものもあり、基準次第で母数が動く可能性があるからである。また、復刻本じたい、複写の影が濃く明瞭ではない頁や、部分的に切り抜かれた頁もわずかながらに存在するため、上記の件数を正確な数字としてとらえるのではなく、あくまでも目安として考えたい。

日本文学に比すれば、ロシア・ソビエト文学の一項目あたりの記事が占める面積は総じて大きめである。一つの項目について、多くのロシア・ソビエトの作家・芸術家の名前が列挙されるケースも見られる。したがって、ここで確認できそうなことは、ロシア・ソビエト文学・芸術のトピック数は多くはないものの重要度は高めである点、また同じないし類似した事項の反復掲載が見られる点に留まるであろう。

さらに、本稿末尾に添付した資料を見れば、時期的に、文学・芸術関連では1946年3月5日・第

73号で「ロシヤ文学の世界的意義」という文芸評論が初めて登場し、1949年10月29日・第646号で「伝統に輝くモスクワ小劇場　創立百二十五周年を祝う」の記事が最後であることが確認できる。

その中で、当該の記事数が多い時期に焦点を絞ると、1946年10月（11件）、1947年3月（12件）・4月（10件）・6月（17件）・7月（14件）、1948年2月（10件）・3月（12件）4月（12件）、1949年4月（18件）が比較的に多い。1945年に少ないのは、この冬は抑留された直後であり、それは収容所の建物さえも自前で作らなければならなかった日本人捕虜たちにとって、飢えと寒さと重労働による最も過酷な時期だったためだろうと推察される。1948年は、全体を見れば、連載されたソビエト作家シリーズで作家の紹介が系統立ててなされており、質量ともに充実している時期と言える。

なお、文学のジャンルとしては、小説・随筆・詩・文芸評論・ルポルタージュ（報告文学、記録文学）があり、小説は連載形式をとる場合もあるものの、それを除けば抜粋や紹介という簡略化された形になっている。文学のテーマ別に整理すれば、①戦争もの、②労働者もの、③革命もの、④レーニン＆スターリンの伝記的逸話というように、４つに大別できる。

そして、掲載紙面は三面または四面が多いところから、文化的な読み物としての位置づけと判断される。しかしながら、「ソヴエート文学の世界的意義」（1948年9月4日・第466号）等のように、国家的・政治的イデオロギーが前面に出された総論であれば、二面で扱われる場合もあった。こうしたことから、文学に国家的・思想的・社会的使命が課されていた、つまりプロパガンダとしての機能が期待されていた様子がうかがえる。

２－２．内容

先述したように、1948年6月－9月にはソビエト文学の紹介シリーズがあるが、添付資料にある通り、作家の傾向はやはりソ連の同時代作家が中心であり、論調には「写実」「リアリズム」への肯定的な姿勢が目立つ。見出しや文章に頻出する用語として、「革命」「人民」「建設」「未来」「新しき」「先駆的」「先端」「進歩的」「愛国」「戦勝」「反ファシズム」「斗争」「正義」が挙げられる。これらは、いずれの記事にも必ず一つは含まれており、公式の必須事項であった節が見られる。

また、もう一つの特徴として指摘できるのは、ロシア近代文学の〈ソビエト化〉という現象だろう。いかなる作家であろうとも、掲載されるやいなや、その作家的人生における革命・革新、運動、人民への奉仕の面が肥大化し、社会主義リアリズム文学の枠組みに回収されていくような、〈ソビエト化〉とも言うべき傾向が確認できる。

それに関連して、19世紀の詩人・小説家プーシキンの神格化も顕著である。添付資料のNo.226にあるように、予告記事を掲載した上で、No.234-236では４頁しかない新聞の見開き２頁

を用いて、プーシキン生誕百五十年祭が大々的に論じられている。No.207にあるように、同じ19世紀の作家ゴーゴリについても生誕百四十周年の記事があるものの、記事の大きさも扱いもプーシキンとは比較にならないほど小さなものである。

プーシキンがロシアにおいて「国民文学の祖」として別格の地位に置かれるのは今日においてもなおそうなのであるが、ここで考えたいのは、この『日本新聞』でどのように語られているのか、ということである。

「プーシキン生誕百五十年祭」（添付資料 No.234、第584号、1949年6月6日）

彼の作品の中にはロシア人民のすぐれた特質―自由に対する熱愛、非凡な才能。祖国愛、誠実。勤勉、これらがすばらしい迫力を持って描かれている。プーシキンの一生―それは人民への献身的奉仕。ならびに誠実な勤労人民の福祉と祖国の繁栄、幸福をめざす斗争の生きた模範であった。

この引用から見出せるのは、勤勉かつ誠実な愛国作家が人民の福祉や幸福のために献身的奉仕に一生を捧げたというプーシキン像であり、それが模範とされたことである。つまり、すでに国民文学の祖というロシア文学の絶対的な〈正典〉としてその名が定着していたプーシキンを、〈ソビエト的〉用語で語り直すことによって、ロシアの古典と巧みに連結させながら新しいソビエト文学を権威づけていくという方向を持っていたと考えられる。

さらに、もう一つ浮かび上がるのは、『日本新聞』の文学空間における支配的価値観が、「社会主義リアリズム」「世界的意義」「社会変革」との結びつきや、そして作家自身による国家への「献身」や「奉仕」（軍人、労働者等）に重きが置かれているという点であろう。

その一端は、次のア・フアデーエフの「ソヴエート文学について」という文芸評論にも表れている。ファデーエフは、ソビエト文学の第一人者として知られ、当時の文学運動の論客でもあった。

ア・フアデーエフ「ソヴエート文学について」（添付資料 No.209、第556号、1949年4月2日）

ソヴエート文学は、新しいソヴエート的生活のなかから生まれたのである。…（略）…社会主義リアリズムとは生活を発展の中に描く文学方法であり、今日の生活の中に未来の偉業を見出しかつそれを力強く描く文学方法である。…（略）…社会主義リアリズムは、発展の中において生活の写実を描写しているため、革命的浪漫主義をもその中に融合させているのである。…（略）…ソヴエート文学は、人民、民族、国家、全人類に対する烈々たる責任に基づいてその活動を展開しているのである。

『日本新聞』におけるロシア・ソビエト文学の評論は、数がさほど多くはないにも関わらず、論調が固定化しており、閉塞感が感じられる。ソ連の『プラウダ』の記事の翻訳・抄訳をコラージュした紙面は高い濃度を保っている。このようにイデオロギー的統制が強化された背景には、先述した当時のロシア国内の情勢も関わっていると考えられる。

それは当時の文学をめぐる状況にも投影されている。第二次世界大戦中に、文化や宗教活動に対するイデオロギー上の統制が緩和されたものの、戦後に冷戦が始まると、西側諸国との対立が鮮明になり、また戦後の復興が国家的急務に掲げられたこともあり、再び統制の強化の道を辿り始める。1946年8月に党中央委員会決議があり、「文学は社会主義建設における青年の士気を高めるものでなければならない」とする党の文化政策担当政治局員ジダーノフの演説が、体制を規定し、文学への圧力を強めていった。具体的には、西側の影響を感じさせる文学に対する「コスモポリタニズム」「フォルマリズム」のレッテルを貼って排除ないし追放するという動きである。

その結果として、党の路線から逸脱しない反西欧小説への礼賛や、肯定的主人公の英雄的行為への単純な賛美、現実を美化した「無葛藤的」な内容の文学の量産という事態へ突き進んでいく。『日本新聞』が発行された時期は、ちょうどその統制が厳しい時期にあたる。それゆえに、この新聞の情報源や管理元を考えれば当然とも言えるが、新聞に掲載される文学・芸術関係の記事の選択や内容にも、そうした傾向が直接的に反映され、政治的要求に応えることになった、と考えられる。

このような見地に立てば、『日本新聞』の読者が触れたロシア・ソビエト文学は、ソビエトのプロパガンダ小説・詩が多く、ロシア文学の読み方についてもプロパガンダ的作法を身につけることが容易な環境にいたと推測される。

最後に、印象記についても触れておきたい。日本の現在を浮かび上がらせる情報メディアとして１－１に『赤旗』を挙げたが、ソ連記者の日本印象記もその役割を果たしていたようである。書き手は記者、軍人、作家であり、内容は東京を中心に街や人々の様子、政治や社会問題、体制の変化、たとえば財閥解体、農地解放が記されている。いずれの印象記にも登場するのは、アメリカ、そしてマッカーサーであるが、アメリカは日本の「抑圧者」という位置づけとなっており、文言にはアメリカに対する強い敵意が映し出されている。印象記の読み手は、そうしたソ連の人の身体を通過した日本を仮想体験することになり、そこには日本人としての自己とソ連にいる自己という、二重化したまなざしで日本のイメージが描かれるという仕組みがあったと考えられる。

３．捕虜を生かすための文学／捕虜が生きるための文学

前節の特徴の概括に添付資料を合わせて考察を加えれば、ロシア・ソビエト文学を中心に据えた『日本新聞』の文学空間から次の５点を指摘することができよう。

(1) 複数の情報源から情報を収集しており、戦時中に向上した情報伝達の技術力も手伝って、エレンブルグやファデーエフらのソ連の文芸時評の先端に接触していた点（資料 No.164・165等）。

(2)「ソヴエート文学」の紹介シリーズや、折々の作家紹介からは、多民族から成るソビエト同盟文学の多様性を強調する立場がうかがえる点。プーシキンが最たるものだが、古典（伝統）の強調によるロシア文学の権威付けの意図が透けて見える。「古い伝統を革命の鉄火で鍛へたロシア文学」（資料 No.64）ゴーリキーを頂点として「世界文学の先頭にたつソヴエート文学」（資料 No.154）という小見出しに端的に示されているように、その空間性と時間性を拡張することで、まだ新しいソビエト文学の優位性を担保するための戦略とも受け取れよう。

(3)「民主運動」の御旗の下、ロシア・ソビエト文学と日本文学とを地続きで組み込んでいく様子も見受けられる点。紙上では、徳永直ら戦前の日本のプロレタリア作家・作品と、ソビエトの作家・作品とを同一線上に併載・紹介している。イデオロギーは国家を超えるというインターナショナルの思想や、連帯の精神に結びつく思考と重なるような配置である。その意味では、国家・民族・言語・文化の境界を越えた地平に集約される〈民主化教育の教材としての文学〉というあり方が問題化することになろう。
一例として、添付資料 No.174（第466号）の記事には、「偽りを許さぬ真実の文学・ソヴエート文学」「世界文学の導きの星　世界の進歩的作家を鼓舞激励」という二つの小見出しがあり、次のような論じ方が見られる。

> シヨーロホフ、トルストイ、ファヂーエフ、グロースマンその他数十人のソヴエート作家の作品が欧米で非常に歓迎され広く読まれているのも当然である。…（略）…日本でも露旗のもとに作家・小林多喜二・徳永直…（略）…世界の誠実な作家たちは、反動とフアシズムの復活に抗して斗いつつソヴエート文学、すなわち意志、理智および感情の偉大さを描き、人間を斗いつつあるまた建設しつつある創造者として描いている真の人民の文学たるソヴエート文学にたえざる援助を見出している。

(4) ソビエトと日本、書き手の有名か無名かといった垣根を越えて、作品が混在する点。『日本新聞』では、２枚立て、ないし４枚立てというごく限られた紙幅に、かなりの数のトピックが詰め込まれている。その結果、レイアウトが、たとえば添付資料 No.193（第516号）のように、詩コンクール作品欄にソビエトの作家シーモノフの訳詩と読者の投稿詩とが併載されるといった事象が見られる。これは、「翻訳」したという日本人読者の手が加えられた事実こそが重要であると考えたためになされた措置かもしれないが、この他にも、徳永直の小説

の隣に、日本人捕虜のつくった詩や歌が掲載されるなど、様々な例を列挙することができる。これらは意図してそうなったのか、あるいは物理的な必然性の帰結としてそうなったのか判然としない。だが、書き手を有名／無名で分断せず一つの図面に置くという点で、読者に対して、ロシア・ソビエト文学とのつながり、日本文学との結びつきを感じさせることにもなり、少なくとも理念上は、『日本新聞』において文学としての一体感、あるいは収容所の〈外〉の世界との接続を演出する助けになっているのではないかと考えられる。

(5) 抑留者コミュニティ内の様々な関係性（加害／被害の関係、支配／被支配の関係、敵／味方の関係、信用／不信の関係、文化や価値観の相違、利害の対立等）を修復したり、ソ連という国家体制に支配される一方で、権力への抗いを謳うという論理的矛盾を隠蔽したりする機能が、文学に期待された向きがある点。

日本人捕虜収容所を一つのコミュニティとして考えた場合、その成り立ちからして、それはきわめて強制的かつ不条理なものである。内部での抗争はもちろんのこと、敵対関係にあったソ連に連行され、支配され、生きるために重労働が課され、日本では公には敵視していた〈民主化〉の教育を受けるという過酷な現実は、否が応でもソ連という国家やロシア人との向き合い方という問題に突き当たることになったであろう。そして、そこにはただならぬ葛藤があり、日本人相互の間でも種々の紛争の火種が含まれていたことが想像される。

そうした状況の中で、ソ連兵としては抑留者の労働の効率を上げ、生産力を向上させるという現実的な任務がある、また抑留者の方も生き延びるためになんとか自分の心情に折り合いをつけて日々のノルマをこなす必要が生じる。その場合、『日本新聞』で文学がどのようなものとして考えられていたかについては、文学は単に労働後の慰労や束の間の娯楽としてのみの有用性が期待されていたわけではないであろう。

山田理恵の前掲論文で指摘されるように、『日本新聞』に収容所内のスポーツ記事や演劇・演奏会など娯楽活動が掲載されており、そこには日本人の側からもバレーボールのネットをつけてほしいなどと要望を出して叶えられたという例があるが、ここからも日本人捕虜・抑留者の労働できる身体づくりと精神の安定が、日本人側からもロシア人側からも重要視されていた様子がうかがえる。文学の場合もそこに何らかの現実的な目的があるからこそ、記事が新聞に掲載されると考えられる。

収容所のコミュニティに対するロシア人、日本人双方の責任というレベルで考えるならば、文学はレーニン・スターリン主義の教化政策の枠内に留まるものではなく、もう一つの姿が見えてくるであろう。たとえば添付資料 No.154（第432号）にソビエトの作家と西欧文学の作家を比較してその大きな違いとして、「ソヴエート作家は人の心をなおす技師」と説く記事がある。精神を病む人がソビエトの作家の作品を読むことで励まされ、「良き道」に導かれるのだと述べている。そうすると、「道」を誤った人を〈正しい〉方向に修正するといっ

たイデオロギー的性格を前提としながらも、文学に期待された役割の一つに、分断され傷ついた関係を修復したり、受け入れがたい現実を乗り越えたりする力というものがあったのではないかと考えられる。

以上により、『日本新聞』を制作する側から見れば、文学は、ソ連という国家建設計画に捕虜を〈生かす〉ためのものとして立ち現われる一方、読者の側にとっては、捕虜が苛酷な現実に折り合いをつけながら〈生きる〉ためのものとしても存在するという、両義的空間が浮かび上がるのである。

おわりに

無論、ここまで述べてきたことが収容所での文学のあり方すべてを物語るわけではない。本稿は、あくまでも『日本新聞』を素材としたミクロなレベルでの整理を試み、そこから浮かび上がるロシア・ソビエト文学の位置づけに光を当てたものに過ぎない。全体像を解明するためには、さらにいくつかの歴史的・文化的・社会的な文脈に置いた検討を加え、複層的に考察する必要があることは言を俟たない。たとえば、文学の文脈では捕虜による文芸投稿の精査を通したロシア・ソビエト文学の受容の様態、また日本の左翼文学との接続などが考えられ、あるいは抑留者の文脈では戦後のソ連における人の移動、つまり場所との関係性も関わってくる。旧ソ連邦全体の日本人捕虜収容所の問題、またそれをソ連全体の強制収容所という大きな枠組みに配した検討、ひいては戦後ヨーロッパにおける難民危機の問題、すなわち〈帰る祖国〉を失った何百万もの残留者（ユダヤ人や東欧諸国の人々。ポーランド、ウクライナ、ラトヴィア、リトアニア、エストニア、ユーゴスラヴィア等）までをも視野に入れつつ、新たな戦後の体制と関連づけた考察も求められるであろう。

註

1 厚生労働省「ロシア連邦政府等から提供された抑留者に関する資料の公表（特定者の追加掲載）について」（2019年12月6日公表）。2022年9月6日閲覧。

2 若槻泰雄『シベリア捕虜収容所』上・下巻（サイマル出版、1979年）。1999年、明石書店から再刊。

3 Кузнецов С. И., *Японцы в сибирском плену,* Иркутск Изд-во журн.《Сибирь》, 1997. 日本語訳書は、セルゲイ・クズネツォフ『シベリアの日本人捕虜たち』岡田安彦訳（集英社、1999年）。他に、ガリツキーの論文「ソ連における日本人捕虜と抑留者」（Галицкий В. П., Японские военнопленные и интернированные в СССР, *Новая и новейшая история. № 3*, 1993）等がある。

4 ジェルゾッド・ムミノフ「冷戦初期日本における管季治の犠牲―赤狩りとソ連からの引揚者」

（下斗米伸夫編『法政大学現代法研究所叢書39　日ロ関係―歴史と現代』、法政大学出版局、2015年）

5 高杉一郎『極光のかげに』（岩波書店、1991年）、斎藤六朗『シベリアの挽歌』（終戦史料館出版、1995年）

6 *Японские военнопленные в СССР. 1939–1956. Документы и материалы*, Под ред. М. Загорулько. М.: Логос, 2000.

7 四國五郎『わが青春の記録』全２巻（三人社、2017年）

8 ドキュメンタリー番組は、小柳ちひろ『女たちのシベリア抑留』（文藝春秋、2019年）として書籍化されている。

9 今立鉄雄『日本しんぶん』（鏡浦書房、1957年）

10 片岡薫『シベリア・エレジー―捕虜と「日本新聞」の日々』（龍渓書舎、1989年）

11 山田理恵「シベリアの日本兵捕虜収容所における体育・スポーツ活動：『日本新聞』を手がかりに」（『体育學研究』第46巻6号、2001年）

12 宮川真一「占領期ソ連のシベリア抑留者教育―『日本新聞』の描く天皇像」（『SOCIOLOGICA』Vol.42, No.１－２）

13 稲葉千晴編『ロシア外交史料館　日本関連文書目録Ⅱ（1917-62年）』（ナウカ、1996年）、マイクロフィルム『外務省記録』（1945-1951）（外務省外交史料館所蔵）等が参考資料として挙げられる。

14 『日本新聞』第200号（1946年12月28日発行）第３面の「壁新聞短評」に、「いまではすべての収容所が壁新聞をもつてゐる」と記されている。

15 『日本新聞』の引用本文の出典は、朝日新聞社編『復刻　日本新聞』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（朝日新聞社、1991年）である。本復刻資料は、ハバロフスクの極東軍管区軍事史博物館所蔵の『日本新聞』の第１号－第662号の全ページを複写したものである。なお、引用にあたって、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに適宜改めた。引用文中の下線は、すべて引用者による。引用本文及び添付資料の中に、現在では不適切と認識されている表現がある場合、当時の時代状況に鑑み、原文を尊重しそのまま掲載することとした。

16 1948年5月1日付の第412・413号から「日本しんぶん」へと改称されたが、本稿では『日本新聞』の表記に統一する。新聞は、全文おおむね日本語であったが、新聞の末尾にはほぼ全号にわたりロシア語で、「ソ連国内で発行される日本人捕虜向けの新聞」と記されている。

17 概要の記述にあたり、主に、山田理恵の前掲論文及び宮川真一の前掲論文、また『復刻　日本新聞』第Ⅰ巻付録「「日本人捕虜に情報。ニュースの提供が目的」―『日本新聞』編集長コワレンコ氏に聞く」及び第Ⅲ巻付録「『日本新聞』とシベリア抑留軍事捕虜の民主運動―元同紙日本側編集責任者・浅原正基氏に聞く」を参考にした。

[18] 宮川真一、前掲論文、152頁。

[19] 2018年9月に稿者が現地に訪れた際には、かつて編集所があった建物は現存しており、地元の会社のオフィスに使用されていた。

[20] 山田理恵の前掲論文の他、前掲の『復刻　日本新聞』第Ⅱ巻付録「『日本新聞』の発行に携わって（座談会）」（宗像創・片岡薫・若林勲・岸宣史・林義実、オブザーバー：高橋大造、司会：白井久也）4-5頁を参照。

[21] 宮川真一、前掲論文、153-154頁。

[22] 小林昭菜『シベリア抑留』（岩波書店、2018年）91頁。

[23] 富田武『シベリア抑留』（2016年、中公新書）130-131頁。

付記

本稿は、日本比較文学会北海道支部・東北支部第６回比較文学研究会のシンポジウム「北方体験とその表象―シベリア・サハリン・満州―」（2022年３月30日、於北海道科学大学／オンライン）において報告した内容の一部を改変した上で原稿化したものである。執筆にあたり、添付資料の項目を拡充した。なお、JSPS 課題番号22H00642の成果の一部である。

〈資料〉『日本新聞』掲載のロシア・ソビエト文学・芸術関連記事

※旧漢字は新漢字に改め、仮名遣いは『復刻　日本新聞』のままとした。
※ソ連作家による日本文学評論及びソ連記者による旅行記を含む。
※［　］に溝渕による注を記す。
※当時の時代状況に鑑み、資料として差別的表現も原文のままとした。
（作成は溝渕）

	発行年	月日	号	面	記事
1	1946	3.5	73	3	ロシヤ文学の世界的意義
2	―	5.2	98	3	エヌ・ロゼンクープ「聖なる光」（一）
3	―	5.4	99	3	エヌ・ロゼンクープ「聖なる光」（二）
4	―	6.20	119	3	芸術の神髄、人道主義具現　世界最高水準を行く　ソ同盟演劇展望
5	―	6.22	120	3	ロモノソフ著作集発刊
6	―	6.25	121	3	ソ同盟が生んだ世界的文豪　エム・ア・ショーロホフ
7	―	6.29	123	2	レーニンと共に輝く　噫プロレタリア文豪　ゴーリキイ逝いて十年
8	―	―	―	―	ゴーリキイ「うみつばめのうた」
9	―	10.1	163	3	フアヂエエフ小説「若い近衛兵」（1）
10	―	10.3	164	3	フアヂエエフ小説「若い近衛兵」（2）
11	―	10.5	165	3	フアヂエエフ小説「若い近衛兵」（3）
12	―	10.10	167	3	エフ・パンフエーロフ「自分の目で」 ※回番号無し
13	―	10.12	168	3	エフ・パンフエーロフ「自分の目で」 ※回番号無し
14	―	10.17	170	3	エフ・パンフエーロフ「自分の目で」（3（ママ））
15	―	10.29	175	3	文化生活点描　芸術展・演劇
16	―	―	―	―	青年市民教育のモスクワ青年劇場
17	―	10.31	176	3	ソヴエート映画に栄冠　参加二十六ヶ国の国際映画祭
18	―	―	―	―	プーシキン名称国立博物館再開
19	―	―	―	―	エフ・パンフエーロフ「自分の目で」（3（ママ））
20	―	11.5	178	3	エフ・パンフエーロフ「自分の目で」（5（ママ））
21	1946	11.23	185	2	ケー・シーモノフ「日本の旅から帰りて　革命詩人西澤隆二の印象」（上）
22		11.26	186	2	ケー・シーモノフ「日本の旅から帰りて　革命詩人西澤隆二の印象」（下）
23	―	11.30	188	4	ボリス・ゴルバトフ「穢多」（1）

24	―	12.7	191	4	ボリス・ゴルバトフ「穢多」（２）
25	―	12.10	192	3	文化短信二題　ウクライナ風刺オペラ『ナレチエーナ』公演・キルギーズ共和国オペラビレー劇場の建設開始
26	―	―	―	4	ボリス・ゴルバトフ「穢多」（３）
27	―	12.12	193	4	ボリス・ゴルバトフ「穢多」（４）
28	―	12.14	194	4	ボリス・ゴルバトフ「穢多」（５）
29	―	12.17	195	4	ボリス・ゴルバトフ「穢多」（６）
30	1947	1.18	208	4	日本新聞第二百号応募記念作品　マイケルゴールド原作「詩一億二千万」加藤信也訳
31	―	2.1	214	3	暦に拾ふ「ロシアの文化を作った人々　新設欄紹介　文化人列伝」
32	―	2.11	218	3	暦に拾ふ「２月９日　ロシアの文化を作った人々　民衆の文学者ドストエフスキー」
33	―	2.15	220	3	暦に拾ふ「２月15日　民族音楽の始祖　作曲家グリンカ」
34	―	2.20	222	3	プーシキン逝いて百十年　激動期のロシアの悩みを美しく描き出した民族の詩人
35	―	3.4	227	2	ヴィソコ・オストロフスキー「東京にて」上
36	―	―	―	3	文化短信　民族文学作品集の発行
37	―	3.6	228	2	ヴィソコ・オストロフスキー「東京にて」下
38	―	―	―	3	暦に拾ふ「３月４日　帝政ロシアを辛辣に描いた作家ゴーゴリ」
39	―	3.11	230	3	暦に拾ふ「３月10日　自由のために闘つたすぐれた詩人シエフチエンコ」
40	―	3.20	234	3	ソ同盟の演劇点描　ソ同盟作家の新作を上演　各地の劇場をめぐる
41	―	―	―	―	暦に拾ふ「３月19日　真の民族的な歴史画家スーリコフ」
42	―	3.27	237	2	ヴエ・イオルダンスキー「日本印象記」（１）
43	―	―	―	3	暦に拾ふ「３月28日　ふるい伝統を破つた天才的作曲家ムソルグスキー」
44	―	―	―	―	大人気のソヴエート音楽　世界各国で好評を博す
45	―	3.29	238	3	暦に拾ふ「３月31日　悲哀のロシアを描いた秀れた写実派作家グリゴローヴイツチ」
46	―	―	―	4	ヴエ・イオルダンスキー「日本印象記」（２）
47	―	4.1	239	2	ヴエ・イオルダンスキー「日本印象記」（３）
48	―	4.5	241	2	ヴイソコオストロフスキー「京都にて」上
49	―	―	―	3	暦に拾ふ「４月６日　ツアー制度と闘つた革命的思想家ゲルツエン」

50	―	―	―	―	世界文学の古典を出版
51	―	4.8	242	2	ヴイソコオストロフスキー「京都にて」下
52	―	―	―	3	暦に拾ふ「４月６日　□［注：消字・虐か？］げられた者を描いた革命的作家ウスペンスキー」
53	―	4.10	243	3	絢爛たるロシア・バレーの競演　最近のモスクワ『大劇場』から
54	―	4.12	244	3	不滅の名声博すロシア文学　世界文学史に輝かしい功績
55	―	4.15	245	3	暦に拾ふ「４月14日　永遠に若々しく力強い革命的情熱詩人マヤコフスキー」
56	―	4.19	247	3	新作オペラを書卸し　革命記念日を期して上演
57	―	5.10	256	4	暦に拾ふ「５月10日　ツアーと戦ひ抜いた偉大なる諷刺作家シシエドリン」
58	―	5.15	258	3	伸び行くソ同盟映画　芸術の香り高き名作のかず／＼―最近の映画に拾ふ―
59	―	―	―	―	迫真力ある立体映画　眼鏡のいらぬ画期的発明を完成
60	―	5.22	261	3	暦に拾ふ「５月25日　祖国に忠実につかへた偉れた寓話詩人デミヤン・ペードニー」
61	―	5.29	264	3	暦に拾ふ「５月28日　ウクライナが生んだすぐれた革命的作家イワン・フラーンコ」
62	―	5.31	265	2	ヴエ・イオルダンスキー「続　日本印象記」（１）
63	―	6.3	266	2	ヴエ・イオルダンスキー「続　日本印象記」（２）
64	―	―	―	3	最近のソ同盟文学（上）　古い伝統を革命の鉄火で鍛へた前進するロシア文学の展望　ソヴエート社会が生んだ『新しい人間』を描写
65	―	―	―	―	暦に拾ふ「６月４日　すぐれた自然描写の抒情詩人マイコフ」
66	―	6.5	267	2	ヴエ・イオルダンスキー「続　日本印象記」（３）
67	―	―	―	3	最近のソ同盟文学（下）　写実と剛健さ　戦後ソ同盟文学の諸作品
68	―	6.7	268	2	ヴエ・イオルダンスキー「続　日本印象記」（４）
69	―	6.10	269	2	ヴエ・イオルダンスキー「続　日本印象記」（５）
70	―	―	―	3	暦に拾ふ「６月９日　国民の自由を守った革命的な民主闘士ベリンスキー」
71	―	6.14	271	4	建設への意思で鍛えられたソヴエート文学の思想性
72	―	―	―	4	暦に拾ふ「６月14日　ロシア写実劇をつくったすぐれた劇作家オストロフスキー」
73	―	6.17	272	3	ゴーリキー逝いて十一年　ソ同盟の生んだ世界的プロレタリア文豪

74	―	―	―	―	マクシム・ゴーリキー「ダンコの物語」
75	―	6.19	273	3	マクシム・ゴーリキー「鷹の歌」（1）
76	―	6.21	274	3	こよみにひろふ「6月21日　ロシア音楽に新たな途を拓いた有名な作曲家リムスキー・コルサコフ」
77	―	6.26	276	3	マクシム・ゴーリキー「鷹の歌」（2）
78	―	6.28	277	3	マクシム・ゴーリキー「鷹の歌」（3）
79	―	―	―	―	こよみにひろふ「6月28日　ベロロシア文学の創始者民族詩人ヤンカ・クパーラ」
80	―	7.3	279	3	ブルジヨア文化と社会主義文化　平和と民主主義をまもる社会主義文化の本質　人類の発展に指導的役割
81	―	―	―	―	ソヴエート政治・文学書だより　レーニン全集第四版　スターリン全集第一版
82	―	7.10	282	3	スターリン賞の話　科学と芸術の祝典
83	―	―	―	―	ソ同盟文化ニュース　マヤコフスキー博物館・詩人叢書の刊行・モスクワで劇場を建設
84	―	―	―	―	解放された芬蘭を描いたスターリン賞の作家エルマル・グリンの「南からの風」紹介
85	―	7.12	283	3	トリカノフスキー「人はさまざま」（1）
86	―	7.17	285	3	こよみにひろふ「7月16日　抑圧に屈せず闘つた人道主義の作家アントン・チエホフ」
87	―	―	―	―	アントン・チエホフ「短篇　官吏の死」中村白葉訳
88	―	7.19	286	3	スターリン賞の話　英雄的な昨日 偉大な今日　明るい明日を描いたソ同盟中堅作家のすぐれた作品［注：トヴアルドフスキー、シーモノフ等］
89	―	―	―	―	こよみにひろふ「7月20日　人民の敵を恐怖せしめた「革命の英雄」「鉄のフエリツクス」ジエルジンスキー」
90	―	―	―	―	トリカノフスキー「人はさまざま」（2）
91	―	7.22	287	3	トリカノフスキー「人はさまざま」（3）
92	―	7.26	289	3	暦に拾ふ「7月27日　ツアー制の緊迫と闘つた天才的ロアシ(ママ)詩人」
93	―	7.31	291	3	ソ同盟文化ニュース　トルストイ記念館
94	―	8.26	302	4	ロマン・キン(ママ)「戦後日本の文学」（1）
95	―	8.28	303	4	ロマン・キン(ママ)「戦後日本の文学」（2）
96	―	8.30	304	4	ロマン・キン(ママ)「戦後日本の文学」（3）
97	―	9.4	306	2	オ・クルガーノフ「日本にゐるアメリカ人」　※回番号無し
98	―	―	―	4	ロマン・キン(ママ)「戦後日本の文学」（4）
99	―	9.9	308	2	オ・クルガーノフ「日本にゐるアメリカ人」2

100	―	―	―	4	ロマン・キン(ママ)「戦後日本の文学」（５）
101	―	9.11	309	4	ロマン・キン(ママ)「戦後日本の文学」（６）
102	―	9.16	311	3	ぬやまひろし「新しい文化建設のために　新らしい時代の文化の華　ソヴエート映画「体育祭」をみる」
103	―	9.27	316	3	パゴーヂン戯曲「野がも」［注：レーニンの挿話］
104	―	10.23	327	3	作家の声　イリヤ・エレンブルグの公開状　平和をみだすアメリカ ハリマン元駐ソ大使の挑発
105	―	10.28	329	2	アンリ・バルビユス「舵手　スターリンの横顔」（１）
106	―	11.1	331	3	アンリ・バルビユス「舵手　スターリンの横顔」（２）
107	1948	1.6	360	3	働くものこそ文化を作る　ソヴエート政権三十年に百十億冊を刊行　不滅の名声博すロシア文学
108	―	1.8	361	2	マヤコフスキー詩「共産党」
109	―	―	―	3	ソ同盟の劇場から　これがアメリカ民主主義‼　パルチザンの勇士「デーヴイスの運命」・黒人の差別待遇を扱つた「深き根」
110	―	1.10	362	3	こよみにひろふ「１月８日　ツアー制と終始斗抜いた人民の中から生れた革命詩人ネクラーソフ」
111	―	1.17	365	3	映画「チアパーエフ」にもられた英雄詩　国内戦を闘い抜いた労働者農民の情熱
112	―	1.20	366	3	こよみにひろふ「１月19日“生き永らえた喜び”八十五歳の誕生日を迎えた「鉄の流れ」の作家セラフイーモヴイツチ健在」
113	―	1.22	367	4	ア・コーノノフ「レーニンの話―その一節―」
114	―	1.24	368	3	ゴルースターエフ「本当の仕事」（１）
115	―	1.27	369	3	ゴルースターエフ「本当の仕事」（２）
116	―	2.14	377	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（１）
117	―	2.19	379	2	ヴィソコ・オストロフスキー「日本印象記」（１）
118	―	2.21	380	2	チエリカノフ詩「合言葉」英雄的に斗うギリシア人民に捧ぐ
119	―	―	―	4	ヴィソコ・オストロフスキー「日本印象記」（２）
120	―	2.23	381	4	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（２）
121	―	2.26	382	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（３）
122	―	―	―	4	ヴィソコ・オストロフスキー「日本印象記」（３）
123	―	2.28	383	3	伝記映画ミクルホ・マクライ 人種的差別待遇と斗う　民族の自由と平和をめざす近代人類学の創始者
124	―	―	―	4	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（４）

125	―	―	―	4	ヴィソコ・オストロフスキー「日本印象記」（4）
126	―	3.4	385	2	ヴィソコ・オストロフスキー「日本印象記」（5）
127	―	―	―	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（5）
128	―	3.11	389	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（6）
129	―	3.13	390	3	ゴーリキー生誕80年祭せまる　人民の愛した文豪の生涯を偲ぶ
130	―	―	―	―	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（7）
131	―	3.16	392	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（8）
132	―	3.18	393	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」（9）
133	―	3.20	394	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」(10)
134	―	3.23	395	3	ニコライ・ヴイルタ シナリオ「スターリングラードの戦い」(11)
135	―	3.27	397	2-3	ゴーリキー生誕八十年　共産主義建設え燃ゆる情熱　人民の中から生れ、人民のために斗つたゴーリキー
136	―	―	―	2	ニコライ・テレシエフ「ゴーリキーの想い出」
137	―	―	―	4	マクシム・ゴーリキー小説「母」
138	―	4.6	401	3	社会主義の生んだ人民の女優　偉大なるソヴエートへの愛―名優マレツカヤ
139	―	4.15	405	3	ロシア科学の父ミハイル・ロモノソフ　人民のための科学え途拓く　ロシア詩壇にれい明
140	―	―	―	―	ソ同盟展望　ソヴエート文化のほまれ　スターリン賞決定
141	―	4.17	406	2	一九四七年度スターリン賞受賞者発表［注：ブベンノフ、パヴレンコ、エレンブルグ］
142	―	―	―	2	エレンブルグの長編小説「嵐（あらし）」 フアシズムに抗する激しい怒り
143	―	―	―	3	ペ・パヴレンコの長篇小説「幸福」の紹介批評（上） 幸福えの途
144	―	―	―	3	映画「シベリア大地の歌」 真の音楽は人民の中から 建設をうたう音楽家の生涯・音楽にかざられた天然色映画
145	―	4.20	407	3	輝かしきソヴエート音楽文化の発展　党中央委員会の特別決議ソ同盟の音楽は人民のものだ
146	―	―	―	―	ペ・パヴレンコの長篇小説「幸福」の紹介批評（下） 幸福えの途

147	―	4.22	408	2	レーニンについてゴーリキーは語る　人びとの不幸に対する激しい怒り
148	―	4.24	409	3	ブベンノフの長篇小説「白樺」
149	―	4.29	411	4	歌・国際民主青年の歌
150	―	5.11	416	3	ヤコブレフ「ソヴエート造形芸術の勝利　ソヴエート美術はソヴエート人の美と力の精華」
151	―	―	―	―	こよみにひろふ「５月10日　人民のために斗つた革命的諷刺文学の作家シチエドリン」
152	―	5.24	422	3	ソ連の生んだ世界的文豪シヨーロホフ　つらぬく社会主義建設の確信
153	―	6.8	428	3	ロシアの生んだ偉大な革命家・作家ベリンスキー　人民の息子・愛国者　ベリンスキー逝いて百年搾取と抑圧に抗し勤労者の□［注：消字］業のため斗つた輝ける先駆者
154	―	6.17	432	2	ソヴエート文学①　世界文学の先頭にたつソヴエート文学　共産主義建設の「人間」を描く
155	―	―	―	―	プロレタリア文学の生みの親マキシム・ゴーリキー
156	―	6.19	433	3	ソヴエート文学②　共産主義建設のソヴエート的人間を描く　党の旗を守りぬいたボリシエビキ詩人マヤコフスキー
157	―	6.22	434	3	こよみにひろふ「６月21日　人民を愛し民族を愛したロシアの偉大な作曲家リムスキー・コルサコフ」
158	―	6.26	436	3	ソヴエート文学③　アレクセイ・トルストイ　つらぬく党の精神とソヴエート愛国主義
159	―	6.29	437	3	スターリン賞に輝くルポルタージユ文学　祖国の地図ミハイロフ　地球の六分の一の地域に社会主義をうちたてた“祖国の地図”
160	―	7.3	439	3	ソヴエート文学④　ニコライ・オストロフスキー“鋼鉄はいかにして鍛えられたか”
161	―	7.6	440	3	ソヴエート文学⑤　国内戦の英雄「チアパーエフ」をかく　革命のほのほの中に育つたドミトリー・フルマーノフ（ママ）
162	―	7.8	441	3	ソヴエート芸術におけるレーニンとスターリンの姿　芸術的にみがかれた写実の姿　頭首レーニンをえがくゴーリキーの「レーニン略伝」
163	―	7.17	445	3	こよみにひろふ「７月16日　ツアー専制に抗す　不屈の斗士・革命的評論家　デ・イ・ピーサレフ」
164	―	7.15	444	3	ソヴエート文学⑥「若き親衛兵」と「壊滅」国内戦から生まれた作家アレクサンドル・フアデーエフ
165	―	7.22	447	3	ソヴエート文学⑦　大祖国防衛戦を描く「嵐」　フアシスト反動との斗争に生きるイリヤ・エレンブルグ

166	―	7.27	449	3	こよみにひろふ「７月24日　ロシアの偉大なる革命的思想家ニコライ・チエルヌイシエフスキー生誕百二十年」
167	―	8.7	454	3	ソヴエート文学⑧　「静かなるドン」のミハイル・シヨーロホフ
168	―	8.12	456	3	ソ同盟展望　花ひらくソ同盟の民族芸術　ウクライナ、ベロロシアの劇団、モスクワに来演
169	―	8.19	459	3	「シベリアの大地の歌」「ロシア問題」優勝　チエツコスロヴアキア国際映画祭おわる
170	―	8.21	460	2	ソヴエート文学⑨　共産主義建設の第一線をゆく若きソヴエート世代の代表・シーモノフ
171	―	―	―	4	ラオヴイアの歌謡祭　九万五千名の歌手・踊り手が出演　ソヴエート民族文化の勝利を示す歴史的祝典
172	―	8.24	461	3	トルクメンの音楽映画　遠方の許嫁　ソヴエート・トルクメンの若者がうたう民族友誼と労働の勝利の歌
173	―	8.31	464	2	ソヴエート文学⑩　“わが党に誠実ならん”人民の詩人スターリスキー
174	1948	9.4	466	2	ソヴエート文学の世界的意義
175	―	―	―	―	ソヴエート文学とブルジヨア文学に現れる人物の二つの型　嵐の中に生まれた新しい人間　オストロフスキーの「鋼鉄はいかにして鍛えられたか」
176	―	―	―	―	ソヴエート文学⑪　人民！これぞ「私の真の名前」民族詩人ジヤンブール
177	―	9.9	468	3	こよみにひろふ「９月９日　“戦争と平和”を描いた世界文学の巨像レフ・トルストイ生誕百二十年」
178	―	9.14	470	3	新映画「貴重な穀物」“人間精神こそ貴重な穀物”　社会主義的労働の中に育つ誠実な人・美しい心
179	―	10.26	488	3	ゴーリキーの名に輝く　モスクワ「芸術座」創立五十年　世界の演劇に革命
180	―	10.30	490	3	青共三十年の記念日に　ソヴエート青年えの贈物　映画「若き親衛隊」
181	―	11.7	493	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（１）橋の上
182	―	11.9	494	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（２）北国の娘
183	―	11.16	497	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（３）飛行士
184	―	11.18	498	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（４）赤軍の誕生
185	―	11.27	502	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（５）一ばんかんじんなこと
186	―	12.2	504	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（６）土曜労働
187	―	12.7	506	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（７）レーニンの演説の力（上）
188	―	12.14	509	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（８）レーニンの演説の力（下）

189	―	12.18	511	3	祖国防衛戦の英雄を描く　新映画「真の人間」　これぞソヴエート的人間の典型
190	―	―	―	4	ア・コノノフ「レーニンの話」（９）71列車の火夫
191	―	12.21	512	3	こよみにひろふ「1936年12月22日　ニコライ・オストロフスキー　死して十二年　“鋼鉄はいかにして鍛えられたか”」
192	―	12.25	514	4	コンスタンチン・シーモノフの詩集より「否！」　ごとう訳
193	―	12.30	516	4	詩コンクール作品　コンスタンチン・シーモノフ「冬の日」　きら・ごとう訳
194	1949	1.15	523	4	ア・コノノフ「続レーニンの話」（１）危険な道
195	―	1.18	524	3	こよみにひろふ「1869年１月17日　人民の怒りと苦悩をうたうロシア古典音楽のすぐれた作曲家ア・ダルゴムイシスキー」
196	―	―	―	4	ア・コノノフ「続レーニンの話」（２）ラズリフ湖畔
197	―	1.20	525	4	ア・コノノフ「続レーニンの話」（３）ラズリフ湖畔（つづき）
198	―	1.21	526	4	ア・コノノフ「続レーニンの話」（４）出迎え
199	―	2.15	536	3	こよみにひろふ「情熱にもえてツアー暴政を描く　すぐれたロシアの劇作家グリボエードフ　死して百二十年」
200	―	2.23	539	1	歌「スターリンの歌」パーヴロ・トウイチナ
201	―	2.24	540	3	新映画紹介　偉大なるソヴエート科学者ミチユーリンの生涯を映画化　天然色映画「ミチユーリン」
202	―	3.17	549	4	ミハイル・ベリヤーエフ「東京印象記」（１）
203	―	3.24	552	4	ミハイル・ベリヤーエフ「東京印象記」（２）
204	―	3.26	553	2	ミハイル・ベリヤーエフ「東京印象記」（３）
205	―	3.29	554	3	新映画「イワン・パーヴロフ」　現代生物学・医学の端緒を開く　革命的自然科学者の生涯
206	―	―	―	4	ミハイル・ベリヤーエフ「東京印象記」（４）
207	―	3.31	555	3	ゴーゴリ生誕百四十周年　不朽の名作「検察官」「死せる魂」
208	―	4.2	556	2	ミハイル・ベリヤーエフ「東京印象記」（５）
209	―	―	―	3	ア・フアデーエフ「ソヴエート文学について」
210	―	4.5	557	4	ミハイル・ベリヤーエフ「東京印象記」（６）
211	―	4.7	558	1	平和をめざし、平和の敵に抗し斗わん　二万の大衆を前にフアデーエフの演説
212	―	―	―	4	ミハイル・ベリヤーエフ「東京印象記」（７）
213	―	4.12	560	4	ゴーリキー生誕百八十一周年記念のために
214	―	―	―	―	マキシム・ゴーリキー「黄色い悪魔の街」（１）
215	―	4.14	561	3	マヤコフスキー死して19年　マヤコフスキーを偲ぶ　ほのほと燃える革命詩人
216	―	―	―	―	マヤコフスキー「ソヴエート・パスポートの詩」

217	―	―	―	4	マキシム・ゴーリキー「黄色い悪魔の街」（２）
218	―	4.16	562	3	一九四八年度スターリン賞受賞者発表［注：カ・エム・シーモノフ詩集「友と敵」、ヴエ・エヌ・アジヤーエフ小説「モスクワを遠く離れて」］
219	―	―	―	4	マキシム・ゴーリキー「黄色い悪魔の街」（３）
220	―	4.19	563	4	マキシム・ゴーリキー「黄色い悪魔の街」（４）
221	―	4.21	564	4	マキシム・ゴーリキー「黄色い悪魔の街」（５）
222	―	4.28	567	2	新映画「エルベ河畔の遭遇」　諸民族の友誼と平和めざす斗争を全世界人民に呼びかける芸術映画
223	―	―	―	3	人民詩人イサコフスキー“人びとよたくましく進め”
224	―	―	―	3	戯曲「モスクワ精神」劇作家ソフローノフ
225	―	―	―	3	ババエフスキー小説「金星勲章拝受者」紹介
226	―	5.5	570	3	ロシア最大の天才詩人　ア・エス・プーシキン　プーシキン生誕150周年近づく
227	―	5.7	571	2	フアデーエフの演説　母親のため、青年のため断乎平和を守りぬかん！
228	―	5.12	573	4	パリー平和擁護世界大会におけるア・ア・フアデーエフの演説　戦争放火者どもに抗し人道主義の偉大な叫びをひびかせよ！
229	―	5.14	574	3	アジヤーエフの小説「モスクワを遠く離れて」　何ものにもうちかつ不屈の精神　極東の建設をえがいたスターリン賞受賞作品
230	―	5.24	578	3	劇作家リュビーモワ　戯曲「スネジョーク」紹介
231	―	―	―	―	フエージン小説「最初の喜び」「常ならぬ夏」紹介
232	―	5.26	579	3	ロシア人民の偉大な息子　写実文学の父ア・エス・プーシキン
233	―	―	―	―	プーシキン詩選「オネーギン」「われ記念碑を建てり」「チアーダエフえ」「自由」「アリオン」
234	―	6.6	584	2	プーシキン生誕百五十年祭　プーシキンは永遠にわれらとともに生きてあり
235	―	―	―	―	プーシキン先週五十万部刊行　百五十年祭記念出版
236	―	―	―	3	ロシアと世界文学の最大の天才　プーシキン詩選「村」「シベリアへの手紙」、「大尉の娘」解説
237	―	6.9	585	1	プーシキン百五十年祭を祝う　ハンガリー、ブルガリア、チエツコスロヴアキア
238	―	6.16	588	1	平和擁護の共同斗争え‼　プーシキン百五十年祭に新日本文学会よりソ同盟作家え挨拶
239	―	―	―	3	新映画「スターリングラードの戦い」
240	―	6.18	589	3	ゴーリキー逝去13周年を迎えて　ソヴエート文学の父　社会主義リアリズムの創始者

241	―	6.20	590	1	インド民主作家同盟全国会議開く　ソヴエート作家代表団の入国をインド当局拒否
242	―	7.15	600	3	天才的ロシアの作家チエホフ死して45周年
243	―	7.16	601	3	貧農の息子から功労俳優え　功労俳優パドマーエフ氏は語る
244	―	―	―	―	ブリヤト蒙古功労俳優を招待　本社で感激の交歓会
245	―	―	―	―	レーニン勲章に輝く音楽・ドラマ劇場　創始者ツイデンジヤポフについて
246	―	7.24	604	2	スターリン賞に輝くアウエゾフの小説「アバイ」 ロシア文化からその進路をみいだしたカザヒの人民詩人をえがく
247	―	8.6	610	3	作家スーロフ「自由な労働」 社会主義的労働の誇りと歓喜の中に生きる新しきソヴエート的人間
248	―	8.20	616	2	ペ・ア・パヴレンコ「アメリカ印象記」（１）
249	―	―	―	3	新映画「ライニス」 ラトヴイア人民の誇り　情熱の革命詩人を描く
250	―	8.25	618	2	ペ・ア・パヴレンコ「アメリカ印象記」（２）
251	―	8.28	619	2	ペ・ア・パヴレンコ「アメリカ印象記」（３）
252	―	9.1	621	4	ミハイル・ベリヤーエフ「日本の農村にて」（１）
253	―	9.8	624	4	ミハイル・ベリヤーエフ「日本の農村にて」（２）
254	―	9.13	626	4	ミハイル・ベリヤーエフ「日本の農村にて」（３）
255	―	10.2	634	2	ショスタコヴイツチ作曲「平和は戦争に勝つ！」 映画「エルベ河畔の遭遇」主題歌
256	―	10.6	635	3	人民への奉仕こそ最大の歓び　ソ同盟人民俳優ア・ジーキー
257	―	10.13	639	3	スターリン賞受賞者チーホン・シヨームシキン作小説「アリテツト、山え去る」（紹介）
258	―	―	―	―	新映画「コンスタンチン・ザスローノフ」 ベロロシア・パルチザンの英雄的斗争を描く
259	―	10.15	640	3	輝くロシアの詩聖レルモントフ生誕135周年
260	―	10.25	644	2	ソ同盟作家フアデーエフの演説　中ソの文化的連繋を強化せん
261	―	10.29	646	3	チエルヌイシエフスキー生誕60年　ロシア民族が誇る革命的作家・評論家
262	―	―	―	―	伝統に輝くモスクワ小劇場　創立百二十五周年を祝う

Nihon Shimbun and Russian/Soviet Literature: The Literary Space of the Siberian Internees

Sonoko MIZOBUCHI

Key Words: Nihon Shimbun, Russian and Soviet literature, Siberian Internment, Japanese prisoners of war, concentration camps

After Japan's surrender in World War II was decided, the tabloid edition of The Nihon Shimbun (September 15, 1945 - December 30, 1949), published in Khabarovsk in the Far East, was the only official Japanese language newspaper for internees in Siberia. Placed under the Main Political Directorate of the Soviet Army and Soviet Navy, it aimed at educating Japanese prisoners of war on political thought, but the content of the articles included literature as well as politics and society. The sources of information were the news media of both the Soviet Union and Japan at the time, and Japanese people also participated in the publication. In this paper, while considering the nature of The Nihon Shimbun as a propaganda medium, I will examine what kind of literary space emerged from the closed space of the camp by connecting it with the inside of the Soviet Union and Japan through that information. In particular, after extracting and organizing related articles from Russian and Soviet literature, I try to find clues to discuss the literary experiences shared among the Siberian internees.

Based on the results of analyzing and organizing the data, the following five points emerged. (1) Information was collected from multiple sources, and with the help of information transmission technology that improved during the war, its transmission was quite fast and was on the leading edge of the Soviet literary commentary. (2) From the introductory series of Soviet literature and occasional introductions of writers, we can see a position emphasizing the diversity of multi-ethnic Soviet literature. (3) Under the slogan of a "democratic movement," it seems that Russian/Soviet literature and Japanese literature were incorporated in a contiguous manner. (4) Works are mixed in a manner that transcends the boundaries of the Soviet Union and Japan, regardless of whether the writer is famous or unknown. (5) Literature was expected to have the function of repairing various broken relationships within the camp community.